

ホーソンと深層心理学 —— 緋文字を中心に ——

松村真琴

ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64) の作品には、完全な善人も完全な悪人も決して登場しない。『緋文字』(*The Scarlet Letter*, 1850) において、悪鬼と呼ばれ、「許されざる罪」を犯したチリングワース (Chillingworth) できえ、その動機にはどこか人間らしさが感じられるし、反対に立派な牧師と尊敬されているディムズデル (Dimmesdale) は「欺瞞の罪」を犯している。自らをロマンス作家と称しながら、ホーソンが登場人物を一つの象徴に限定して描かないのは何故だろうか。それはホーソンが、人間の心には相反する二つの性質が同時に存在すると考え、どちらか一方のみを捉えて人間を描くことは不可能であると悟っていたからであろう。つまり、ヘンリー・ジェームズ (Henry James, 1843-1916) が “The fine thing in Hawthorne is that he cared for the deeper psychology. And that, in his way, he tried to become familiar with it.”⁽¹⁾ と述べているように、ホーソンは人間の心、特に深層心理に早くから着目していたと考えられる。深層心理学とは、フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) や、ユング (Carl Gustav Jung, 1875-1962) に代表される人間の無意識を研究する学問である。ホーソンは深層心理学が発達する約70年前に生まれていたにもかかわらず、既に人間の心にある無意識の働きに気付いていたと言える。それは、短篇「憑かれた心」 (“The Haunted Mind,” 1835) の中に言及されている。

In the depths of every heart there is a tomb and a dungeon, though the light, the music, and revelry above may cause us to forget their existence, and the buried ones, or prisoners whom they hide. But sometimes, and ofetenest at midnight, those dark receptacles are flung wide open. In an hour like these, when the mind has a passive sensibility, but no acting strength; . . .⁽²⁾

tomb, dungeon を無意識、light, music, revelry を意識と規定すれば、普段は意識に抑えられている無意識が、真夜中になると表に出てくると読むことができる。さらに「痣」(“The Barthmark,” 1846) の中では、無意識の欲望が夢という具体的な形として現われる。

When the dream had shaped itself perfectly in his memory, Aylmer sat in his wife's presence with a guilty feeling. Truth often finds its way to the mind close—muffled in robes of sleep, and then speaks uncompromising directness of matters in regard to which we practise an uncounscious self-deception, during our waking moments.⁽³⁾

深層心理学では、人が夢を見るのは「外部からの刺激にじゃまされたり、現実生活上の制約を受けたりしないで、自由にものを考えようとする」⁽⁴⁾ためである、と定義されている。ここではエルマー (Aylmer) の「ジョージアナ (Georgiana) の痣をとりたい」という無意識が、睡眠中、意識の働きの停止により夢として現われてくる。

上述のごとく、二つの短篇を通して、ホーソーンと深層心理学の類似点が見て取れるが、『緋文字』を論じるには、深層心理学の中でも、特にユングの理論が有効であろう。それは、性的欲望のみを重要視したフロイトよりも、ユングの方がよりホーソーンの考えに近いと思われるからである。ユングは、性欲を生物学的な深い基礎と心理的なものを合わせ持つ点で注目すべき動因と考えつつ、常に対極的に存在する両面を抑え、それらを共に受けていこうとした。そして心の現象としてそのようなものがあることを、常に経験的に述べようとしたのである。『緋文字』はよく言われているように、姦通後の物語である。ホーソーンは姦通そのものよりもむしろ、人間の心に相反するものの同時存在を認め、罪に対する意識、無意識、社会における人間の心理、行動を描いている。これらの点に我々は、ユングとホーソーンの共通点を見出だすことができる。本稿は、ユングの深層心理学を通して『緋文字』における登場人物の精神分析を目的とするものである。

第1章：ディムズデール

ディムズデールを分析する上で重要なテーマは、彼の精神的変貌であるといえる。「情熱の罪」の結果として、ヘスター (Hester) がパール (Pearl) を抱き晒し台に立たされて以来「欺瞞の罪」を重ねてきたディムズデールであるが、最後の選挙祝賀日に至って、かつてない程の精神的強さを身に付ける。この精神的変貌は、一見唐突のように見えるが、実は彼の自己欺瞞と苦悩の日々のなかで、少しずつ培われていたといえる。人間の心は、安定した意識の状態を崩しても、より高次の統合性へと志向する傾向がある。これをユングは自己実現の過程と呼び、その過程において人間は大変な努力と苦しみを伴うといった。そこで、ディムズデールの自己実現の過程を、二つの面から探る必要がある。まず一つは、影の問題である。

It was his genuine impulse to adore the truth, and to reckon all things shadow-like, and utterly devoid of weight or value, that had not its divine essence as the life within their life. Then, what was he? — a substance?— or the dimmest of all shadows?⁽⁵⁾

ユングのいう影とは、その個人の意識によって生きられなかった半面、その個人が容認しがたいとしている心的内容であり、それは文字通り、その人の暗い影の部分をしてしている。自我があまりに一面的になりすぎる時、それまで自我の力で抑えられていた影の部分が一挙に行動化する。ディムズデールの自我は、“a miracle of holiness”、または“the mouth-piece of Heaven’s messages of wisdom, and rebuke, and love”(p. 142)として人々から受けていた称賛を失うことを恐れ、それゆえに彼はあいまいな告白をし続ける。しかし、ホーソーンは“*He had striven to put a cheat upon himself by making the avowal of a guilty conscience, but had gained only one other sin, and a self-acknowledged shame, without the momentary relief of being self-deceived.*”(p. 144)とあって、彼を“*subtle, but remorseful hypocrite*”と呼ぶのである。このように聖職者として高い地位を望み、現在の栄光を捨てられなかったディムズデールの影は、徹夜の勤行の際、悪鬼、天使、彼の父母、ヘスターやパー

ルなどの形をとってまぼろしとして現われる。ユングが「影とはただ無意識の全体なのだ。』⁽⁶⁾ といったように、ここで現われるまぼろしは実に様々な形態をとってはいるが、全て彼が目そむけたかった自己の内面であろう。そしてディムズデールはこれらの幻影に惑わされることはなかったが、ホーゾーンは“they were, in one sense, the truest and most substantial things which the poor minister now dealt with.”(p. 145)と述べて、影の方がより真実をついているというのである。

さて、これまで牧師自身によって否定されてきた影は、チリングワースがヘスターの前夫であることを知って、徐々に表面化してくる。

The minister looked at her, for an instant, with all that violence of passion, which—intermixed, in more shapes than one, with his higher, purer, softer qualities—was, in fact, the portion of him which the Devil claimed, and through which he sought to win the rest.(p. 194)

さらに、ヘスターとの逃亡を決意した後の森からの帰路において彼は、自分の教区の善良なる信者たちに悪事を働きたい、という欲求に駆られるのである。

In truth, nothing short of a total change of dynasty and moral code, in that interior kingdom, was adequate to account for the impulses now communicated to the unfortunate and startled minister. At every step he was incited to do some strange, wild wicked thing or other, with a sense that it would be at once involuntary and intentional; in spite of himself, yet growing out of a profounder self than that which opposed the impulse.(p. 217)

牧師の影は、もはや目をそむけることが不可能なほど牧師自身の存在を脅かすようになり、影のほうが真実となってしまうかねない、非常に危険な状態にある。彼は、この悪の衝動がどこから生まれてくるものかも理解できない。しかしそこへ、彼自身が悪と認めるチリングワースが登場するのである。牧師は彼の書齋に現われたチリングワースに自分の

影を投影することで、おのれの内面にも悪があったことを認識する。ユングが「生きた形態は、塑像として見えるためには深い影を必要とする。影がなくては、それは平板な幻影にすぎない。」⁽⁷⁾と述べているように、理想的な聖職者であろうとしたディムズデルにも、暗い影の部分が存在する。ホーソーンは彼が自分自身の影を認識して初めて、彼に偉大な神の声を代弁するかのような祝賀説教の原稿を書く力を与えたのである。

次に、もうひとつの重要な側面として、アニマとペルソナがある。ユングは、外的環境に適応しようとする態度、または外界に対して付けている仮面のことをペルソナと呼んだ。人間は、外的環境に適応しようとしすぎて、内的世界への適切な対応を怠ったとき、神経症に悩まされることになる。ディムズデルのペルソナは彼に聖職者らしくあることを要求し、「情熱の罪」の告白を許さなかった。このため、彼は肉体の病気に悩まされ、ホーソーンはこれをチリングワースの言葉を借りて“A strange sympathy betwixt soul and body!”(p. 138)と言っている。一方、ペルソナと相補的な関係にあるのがアニマと呼ばれるものである。一般に言う無意識とは、潜在的に残った個人的体験に基づくものだが、ユングはさらに奥深くに、人類共通の普遍的無意識があるとした。アニマはこの普遍的無意識の中にある元型のうちのひとつで、男性のこころの像のことである。全ての男性は、心の奥にある一つの女性像を持っていると言えないだろうか。そしてこの女性像アニマは、男性を創造か破滅かの岐路に立たせる危険性を持つ。ディムズデルはヘスターと出会い、「情熱の罪」を犯した。さらにヘスターは森で逃亡をそそのかすなどして、ディムズデルを誘惑する。ヘスターは確実にディムズデルのアニマとして彼の人生をある方向へ導いている。そしてついに、本来相補的であるはずの彼のペルソナとアニマの関係は崩れ始めるのである。

No man, for any considerable period, can wear one face to himself, and another to the multitude, without finally getting bewildered as to which may be the true.(p. 216)

ホーソーンは森から戻った牧師を、“a wiser one; with a knowledge of hidden mysteries which the simplicity of the former never could have reached.”(p. 233)と表現している。以前の牧師は、外面を取り繕う

ため、強く一面的なペルソナを身に付けていた。その後、ヘスターによって引きだされた己れの影と、そのヘスターが自分のアニマなのだと認めることが“a knowledge of hidden mysteries”の内容だとすれば、このあと三日後の選挙祝賀日に突如として現われる精神的強さや、秘密を告白する力についても説明がつく。それはディムズデールが自己実現によって得た力である。

ホーソーンはディムズデールを通して何を伝えたかったのか。それは意識と無意識、自我と影、ペルソナとアニマのように、人間は相反する二面性を持ちながら、その均衡を保ち、自己を確立していかなければならない、ということであろう。それが真に「個人」としての自己実現へ到達する道である。聖職者として理想的なペルソナを身に付けていたディムズデールは、それとは相反する性質の影やアニマを自分のなかに認める必要があった。“Be true! Be true! Be true! Show freely to the world, if not your worst, yet some trait whereby the worst may be inferred!” (p. 260)とは、人間が無意識の中で自分と相容れない性質を発見したときにも、決して隠すことなく曝け出し、今まで否定してきた生き方や考え方のなかに肯定的なものを認めて、それらを意識の中に同化していく努力をすることで、真の実体をもった存在となれる、ということではないだろうか。

第2章：チリングワース

チリングワースは、ホーソーンが好んで描く科学者タイプの一人である。しかし、他の作品の科学者に比べて、ホーソーンはチリングワースに対してかなり厳しい態度をとっている。

In a word, old Roger Chillingworth was a striking evidence of man's faculty of transforming himself into a devil, if he will only, for a reasonable space of time, undertake a devil's office. This unhappy person had effected such a transformation by devoting himself, for seven years, to the constant analysis of a heart full of torture, and deriving his enjoyment thence, and adding fuel to those fiery tortures which he analyzed and gloated over.(p. 170)

第1章で見たように、ディムズデールは自らの影をチリングワースに投影している。ディムズデールが影を投影する対象として、『緋文字』には徹底した悪の存在が必要だったのである。このため、チリングワースとディムズデールは、あらゆる点において対照的に描かれている。ディムズデールは激情に駆られ何度も曖昧な告白を繰り返すが、牧師という世俗的な地位を捨てられない。内面の葛藤に悩まされるのも自分のペルソナに固執するがゆえである。一方、チリングワースは、晒し台に登る我が妻を見て沸いた一瞬の激情も意志の力で本性の深みに埋めた。そして内面ばかりを見詰めることが癖になり、外界の出来事にはほとんど関心がない。ユングは、自分と反対のタイプの人間に魅力を感じるようになるのは、自分の内部における個性化の過程が外に向かって呼応するためであると考えた。ホーソーンも序章『税関』(The Customhouse)の中で、“It contributes greatly towards a man’s moral and intellectual health, to be brought into habits of companionship with individuals unlike himself, who care little for his pursuits, and whose sphere and abilities he must go out of himself to appreciate.”(p. 24)と語り、ディムズデールとチリングワースとの出会いを“*There was a fascination for the minister in the company of the man of science.*”(p. 176)と述べている。しかしはじめに抱いた魅力は、自分の劣等機能を持つものに対する嫌悪感へと次第に変化する。

True, he looked doubtfully, fearfully, —even, at times, with horror and the bitterness of hatred, —at the deformed figure of the old physician. His gestures, his gait, his grizzled beard, his slightest and most indifferent acts, the very fashion of his garments, were odious in the clergyman’s sight; a token, implicitly to be relied on, of a deeper antipathy in the breast of the latter than he was willing to acknowledge to himself.(p. 140)

ディムズデールは、これ程の嫌悪感を抱いた相手に自分の劣等機能を結びつけ、最終的に個性化の道を進んでいるといえるが、一方、彼の劣等機能という役割を担ってきたチリングワースはどうなったであろうか。ホーソーンは“*This diabolical agent had the Divine permission,*

for a season, to borrow into the clergyman's intimacy, and plot against his soul.”(p. 183)と言って、彼を悪魔の象徴として描きつつ、やはりその暗い局面のみを捉えて人間を描くことができなかつたと見える。確かに、彼の罪は「許されざる罪」ではあるけれども、“the woman, in whom he hoped to find embodied the warmth and cheerfulness of home”(p. 118)に深く傷つけられたことがすべての動機であると設定しているのである。そして最後に、ディムズデールの精神的成長を促すために、悪魔的役割を果たしてきたチリングワースに、ホーソンは深い同情を示している。

But, to all these shadowy beings, so long our near acquaintances, —as well Roger Chillingworth as his companions, —we would fain be merciful. It is a curious subject of observation and inquiry, whether hatred and love be not the same thing at bottom. ……In the spiritual world, the old physician and the minister—mutual victims as they have been—may, unawares, have found their earthly stock of hatred and antipathy transmuted into golden love. (p. 260)

第3章：ヘスター

ヘスター分析における二本の柱は、置き換えによる自我の防衛規制とアニムスの問題といえる。まず、ヘスターは何故ニューイングランドの地にとどまったのだろうか。

Here, she said to herself, had been the scene of her guilt, and here should be the scene of her earthly punishment; and so, perchance, the torture of her daily shame would at length purge her soul, and work out another purity than that which she had lost; more saint-like, because the result of martyrdom. (p. 80)

ホーソンも “Her sin, her ignominy, were the roots which she had struck into the soil.”(p. 80)と述べているように、彼女はこの地で罪を償うことを運命づけられていたのだとも考えられる。しかし人間は、無意

識に起こした行動に対して適当な理由を付けるものである。つまり、無意識内に起こってきた願望、空想などの心の内容をそのまま意識化すると、不安、不快、罪悪感、恥などの情動を体験するような場合に、自我はその葛藤を無意識化に押し込めようとする。そしてそれらの情動を、現実原則に合うように置き換えて処理していくのである。ヘスターの場合にも“it might be that another feeling kept her within the scene and pathway that had been so fatal.”(p. 80)と語られるように、自我の防衛規制が働いているといえる。

There dwelt, there trode the feet of one with whom she deemed herself connected in a union, that, unrecognized on earth, would bring them together before the bar of final judgment, and make that their marriage—altar, for a joint futurity of endless retribution. Over and over again, the tempter of souls had thrust this idea upon Hester's contemplation, and laughed at the passionate and desperate joy with which she seized, and then strove to cast it from her. She barely looked the idea in the face, and hastened to bar it in its dungeon.(p. 80)

こういった妄念を無意識下に押し込め、苦難の日々を送ったとしても、それは罪を償うことにはならない。ヘスターが心底から悔い改めていない証拠に、森でディムズデルに逃亡を促す場面において、“Thus, we seem to see that, as regarded Hester Prynne, the whole seven years of outlaw and ignominy had been little other than a preparation for this very hour.”(p. 200)と記され、彼女の無意識はただひたすらディムズデルと結ばれることを望んでいた、と明かされるのである。また彼女自身、“You have deeply and sorely repented. Your sin is left behind you, in the days long past. Your present life is not less holy, in very truth, than it seems in people's eyes. Is there no reality in the penitence thus sealed and witnessed by good works? And wherefore should it not bring you peace?”(p. 191)と述べているように、お互いの罪は償われたと考えているが、ホーソーンはこれに反対している。“And be the stern and sad truth spoken, that the breach which guilt has once made into

the human soul is never, in this mortal state, repaired.”(p. 200)最後の晒し台の場面に至って尚、ヘスターには罪の意識がなく、ディムズデルとの未来での永遠の結合を願うが、それに対するディムズデルの答えは「否」である。自己実現を果たしたディムズデルがホーソンと見解を同じくしているのに対し、ヘスターのそれが異なるのは、そこにホーソンの無意識の男性像、女性像が現われているためといえるだろう。

第1章で、男性の自己実現においてのアニマとの統合について述べた。そこでここではアニマと対を為すアニムスの問題を用いて、女性の自己実現について述べたい。アニムスとは女性のこころの像のことであり、女性のなかの男性らしさであるといえる。女性が女性らしく生きていくうちに押し込められた感情は、「～すべきである」「～でなければならない」という、頑固な意見として外に現われてくることが多い。これらの思考はヘスターにも訪れるが、ホーソンはこれを危険なものと捉えている。

In her lonesome cottage, by the sea-shore, thoughts visited her, such as dared to enter no other dwelling in New England; shadowy guests, that would have been as perilous as demons to their entertainer, could they have been seen so much as knocking at her door. (p. 164)

ユングは、アニムスは女性がこれと同化してしまうような場合、女らしさを失う危険性を持つが、それを意識の中に統合したとき、女性の自我はより高い自己と結ばれていくと言っている。しかしホーソンは“such a hopeless task”と言って、この変化の過程にさき否定的である。

Finally, all other difficulties being obviated, woman cannot take advantage of these preliminary reforms, until she herself shall have undergone a still mightier change; in which, perhaps, the ethereal essence, wherein she has her truest life, will be found to have evaporated. A woman never overcomes these problems by any exercise of thought. They are not to be solved, or only in one way. If her heart chance to come uppermost, they vanish.

『緋文字』のヒロイン、ヘスターも一旦はアニムスの問題に直面するが、自我との統合を果たさぬうちに、心の奥に閉じこめられた女らしさを取り戻す。それは病み疲れた牧師を救うため、森で二人が逃亡を決意した後、ヘスターが緋文字を胸から外し、お仕着せの帽子を脱いで豊かな黒髪を露にし、やさしい微笑を浮かべるところに表れている。しかしアニムスの問題を投げ出し、自己実現を達成できなかったヘスターは、とうとう神の次元における罪の意義について、理解できないまま、愛人ディムズデールの死を迎えるのである。最後にヘスターは、一度は離れた恥辱の地に再び戻り、自ら緋文字を身に付けるが、この時点ではもう完全にアニムスを意識下に押し込めてしまっているといえる。それは人々からあらゆる相談をもちかけられるようになったヘスターが“*She assured them, too, of her firm belief, that, at some brighter period, when the world should have grown ripe for it, in Heaven’s own time, a new truth would be revealed, in order to establish the whole relation between man and woman on a surer ground of mutual happiness.*” (p. 263) と時間の経過に依存的になっていることから伺えるのである。

ホーソーンは、女性にアニムスを統合してより強く高い次元で生きることを望んでいなかったのではないだろうか。一般の男性は、女性がアニムスに目覚めることを好まない。ヘスターが、アニムスの問題を投げ出し、女性らしさやディムズデールへの一途な愛を優先させたことに、我々はホーソーンの無意識の女性像を見ることができるのである。

第4章：パール

パールを一人の人格を持った人間として分析することは難しい。何故ならパールは“*a thing incapable and unintelligent of human sorrow*” (p. 93) として描かれているからである。そして様々な場面において、パールは母親であるヘスターの心に働きかけ、時に苦悩を与えながらも、確実にヘスターを墮落から救っている。ヘスターが罪と恥辱から逃亡しようとして、緋文字を投げ捨てたとき、これを戒めたのはパールであったし、また、思索の人生を歩もうとしたヘスターが、アン・ハッチンソンのように新興宗派の女教祖として歴史に名を残さずにすんだのは、神がパー

ルを精神界から与えたためであるといえる。これらのパールの働きは、ヘスターの心の内部で機能するトリックスターの働きである。トリックスターとは、いたずら者、ペテン師なども訳され、神話、伝説の世界にもしばしば登場する道化のことであるが、我々の心の内部にもトリックスターは存在し、時に破壊的に、時に創造的に心に働きかける。いたずら者トリックスター、パールは、手にいっぱい野の花を一輪ずつ母親の胸の緋文字に向かって投げつけたり、刺のついたもみをAの輪郭にそって並べたりする。また、たびたび緋文字の意味を尋ねて母親を困らせるのであるが、ヘスターは“a feeling that her penance might best be wrought out by this unutterable pain”(p. 97)と観念して、黙ってパールを見つめる。それはディムズデルが“that this boon was meant, above all things else, to keep the mother’s soul alive, and to preserve her from blacker depths of sin into which Satan might else have sought to plunge her!”(p. 114)と言ったように、パールがヘスターを墮落から救う役割を負っていたからであろう。この時、パールは自分の役割を正しく評価したディムズデルに感謝の意を表して彼の手にはおぼずりするのであるが、この時以外は、自らの罪とパールの存在を認めようとしなないディムズデルに、“Thou wast not bold!—thou wast not true!”(p. 225)と言って、彼を救おうとはしないのである。

“Come away, mother! Come away, or yonder old Black Man will catch you! He hath got hold of the minister already. Come away, mother, or he will catch you! But he cannot catch little Pearl!”(p. 134)

最後の小川の場面において、パールはトリックスターとしての役割を最大限に果たす。緋文字を投げ捨て、女性としての美と魅力を取り戻したヘスターに向かって、権威ぶった態度で緋文字のあるべき場所を指差し、自由な解放感に浸っているヘスターに反省を促すが、ヘスターが再び緋文字を身に付けると、パールは母親のもとへ駆け寄り、額と頬に接吻する。そして同時に無意識の働きトリックスターは、緋文字にも接吻せずにはいられないのである。緋文字はヘスターに恥辱と苦悩の日々を与えたが、彼女の思想の自由を止めることはできなかった。そこで、パー

ルがヘスターを悪魔の誘惑から救うと同時に、ヘスターの罪を罰し、墮落を阻止する役割を演じたのである。そして最後の晒し台の場面においてパールは、このトリックスターとしての役目を終える。

Pearl kissed his lips. A spell was broken. The great scene of grief, in which the wild infant bore a part, had developed all her sympathies; and as her tears fell upon her father's cheek, they were the pledge that she would grow up amid human joy and sorrow, nor for ever do battle with the world but be a woman in it. Towards her mother, too, Pearl's errand as a messenger of anguish was all fulfilled. (p. 256)

結 論

ホーソーンは1840年元旦、許婚者ソフィア・ピーボディ (Sophia Peabody, 1809-71) に宛てた手紙の中で次のように語っている。

I have a mind, someday, to send my dearest a journal of all my doings and sufferings, my whole external life, from the time I awake at dawn, till I close my eyes at night. What a dry, dull history would it be! But then, life throughout the self—same day—my fits of pleasant thought, and those likewise which are shadowed by passing clouds—the yearnings of my heart toward my Dove—my pictures of what we are to enjoy together. Nobody would think that the same man could live to such different lives simultaneously. But then, as I have said above the grosser life is a dream and the spiritual life a reality.⁽⁸⁾

実際には「税関」において、“we may prate of the circumstances that lie around us, and even of ourself, but still keep the inmost Me behind its veil.”(p. 4)と述べているように、ホーソーンの“spiritual life”については、直接的な言葉で語られていない。そこで、ホーソーンは無意識を作品の中から探っていかななくてはならないのである。『緋文字』は人間の内なる世界を描いた傑作であり、ここには作者の無意識がよく描かれて

いる。社会の一員として生きねばならない外面的な自分と、作家として自己の内面に眼を向け、その間で悩むホーソーンの葛藤はディムズデルに表れているし、他人の心の深層を観察せずにはいられない性格は、チリングワースに描かれている。またヘスターが、自己実現の過程を歩まず、愛を選んだことにホーソーンの女性像が表れているのである。

フロイトが1895年にヒステリー患者の症例について発表し、深層心理学が発達する約45年前に、この心理小説『緋文字』は生まれている。にもかかわらず、現代の深層心理学にも通ずる人間性についてのホーソーンの深い洞察が、現在までこの物語を傑作としている理由であろう。ホーソーンは人間が決して善や悪、どちらか一つのみでは生きられないこと、無意識の心には外面の自分とは相反する人格が存在していること、また自己実現の過程における激しい内面の葛藤に、人間が人間であるゆえの悲劇性を見出だしている。つまり、『緋文字』に述べられている“the darkening close of a tale of human frailty and sorrow”(p. 71)とは、まさにこのような人間性について出した、ホーソーンの悲しい結論だったのである。

注

- (1) Henry James. *HAWTHORNE* (New York: AMS PRESS, 1968), p. 65.
- (2) Nathaniel Hawthorne. *Twice-Told Tales* (The Centenary Edition, 1974), p. 148.
- (3) Nathaniel Hawthorne. *Mosses from an Old Manse* (The Centenary Edition, 1974), p. 40.
- (4) 外林大作 『夢判断』(光文社、1968) p. 13.
- (5) Nathaniel Hawthorne. *The Scarlet Letter* (The Centenary Edition, 1968), p. 143.
以後作品からの引用はすべて上記の版によるものとし、()内に頁数を記す。
- (6) 河合隼雄 『ファンタジーを読む』(講談社+α文庫、1996) p. 321.
- (7) 河合隼雄 『ユング心理学入門』(培風館、1967) p. 102.
- (8) Nathaniel Hawthorne. *The Letters 1813-1843* (The Centenary edition, 1984), p. 395

参考文献

- I・Boom, Harold. ed. *Hester Prynne*, Chelsea House, 1990.
・Hawthorne, Nathaniel. *The American Note-books*, The Centenary

Edition, 1932～

II(1)・河合隼雄『影の現象学』思索社、1980

・小此木啓吾編『フロイト精神分析入門』有斐閣新書、1977

・元田脩一『アメリカ小説研究』開文社出版、1978

(2)・ユング、カール・グスタフ(小川捷之訳)『分析心理学』みすず書房、1976

・ユング、カール・グスタフ(林道義訳)『タイプ論』みすず書房、1987